



TITLE:

# 電子図書館ワーキンググループの活動について

AUTHOR(S):

---

CITATION:

電子図書館ワーキンググループの活動について. 静脩 1995, 32(3): 5-6

ISSUE DATE:

1995-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37361>

RIGHT:

### 用する

ILLシステムでは、文献複写の依頼の相手館を5館まで指定できる。単純に考えれば、5館目でも断られる確立は1/32となる。従って、無理に依頼を抱え込んで処理を遅らせるより、早く処理のできる図書館に回す方が適切である。

当然システムは、謝絶すると自動的に次館へと転送してくれる。附属図書館所蔵や早く手に入る部局所蔵資料の早い処理を心がける。

### 方策3：掛員間の仕事の枠にとらわれない

掛全体の仕事を全員が知ることで、自分の分担、他人の分担という仕事の枠と遠慮の枠をはずす。各々の仕事で主になる担当者はいるが、全員が掛全体の仕事を理解し、状況を見て動くことができるようにした。

### 方策4：環境の改善

ローカルシステムのプログラムを修正し、システムから打ち出す帳票の手直しをした。今回、自分達で業務を見直し、改善の努力をする過程で掛を越えて支援を受けることができた。今では、所蔵の二重調査が不要になっただけでなく、何カ所もの手直しをして、使いやすい帳票になった。

### おわりに

今回のこの改善の報告を書くに当たって、掛員全員に了解を求めた。「このようなことが、他の図書館の参考になるのか？ここだけの特異事情ではないか？」という懸念もあった。しかし、これが附属図書館相互利用掛の現実であった。

この例は、歴史が古く、超大規模大学であるが故の問題であるかもしれない。

しかし、図書館をとりまく環境は、日々変化し、多様化している。無為に対応すると、職場はたこ足状態、迷路と化し全体を見回すことのできない状態に陥る危険性がある。改善を行った今、ILL処理量は65件／1日も可能になり、かつ処理も早くなった。謝絶する件数が増えたにも関わらず、受付件数は4月～12月の9カ月ですでに平成6年度1年分を超えてしまった。サービスをすればするほど増えるのが相互貸借である。

しかし、以前に比べ確実に残業は減り、処理件数が増えても今の方が楽になった。以前のあの苦しさは何だったのだろうというのが感想である。掛全体として自ら仕事をかってでたり、よりよい方法を探るなどより積極的に仕事に関われるようになった。

今回の改善は、ほんの少しの発想の転換と掛員全員の「相互貸借は、図書館利用者へのサービスの最前線」という気概の下、誠意ある努力の結果成しえたものであると思う。

図書館は、進化する生命体であり、図書館を支える我々も健やかな活動体でありたい。まだ、問題点5にあげた部局図書室との関係など、全学的な対応の必要な問題は残っている。今後は相互貸借を含め図書館サービスのあり方について京都大学の図書館員全体で考えていくことができればと願うものである。

## 電子図書館ワーキンググループの活動について

### はじめに

附属図書館では、昨年(1994)の9月26日から10月28日まで開催された展示会「吉田松陰とその同志」に併せて、電子図書館システム「Ariadne」のデモンストレーション(以下、デモ)を行いました。しかしながら、このデモで電子展示できた資料は約60点にすぎず、外部からのアクセスも

できないこともあって、質・量ともに予備実験の段階をでないものでした。このため、デモ終了後に、新たに電子図書館ワーキンググループ(以下、WG)を発足させ、本格的な電子図書館への取り組みを開始しました。これまでの活動と今後の予定について、お知らせします。

### 1 これまでの活動について

電子図書館については、国内・国外を問わず多くのプロジェクトがあり、様々な形態で研究が進められています。ただし、どれもがその基盤としているのは、インターネットによる情報通信です。このため、WGの活動の第1段階は、インターネットへの理解を深めることとしました。現在は、第2段階に入っていますが、ここではWGをふたつに分け、1つのグループでは実際にWWWのホームページを作成することになっています。これは、URLの公開は1月におこなう予定です。もう1つのグループは、電子展示する資料の準備をしています。デモでは、画像データと解説だけでしたが、これに書誌的事項も付与し、点数も数千のオーダーにする予定です。展示内容は、当面、デモでも公開した維新特別資料（尊攘堂資料）を計画しています。

### 2 電子図書館開発室の開設について

電子図書館の研究・開発・作業のために、画像入力システム・日本語OCR装置・検索システム等を集め、電子図書館開発室(D-Lib 開発室)が、附属図書館4階に開設されました。8

月以降は、この部屋の機器を使って、具体的な入力作業が始まっています。画像データは、イメージスキャナー、VTR、LD、ハイビジョンカメラ、Photo-CD等、各種媒体から入力が可能です。入力されたデータは、同じ4階の電算機室に設置されたセンターサーバに転送し、WWWによる試験公開を予定しています。

### 3 今後の予定について

電子図書館システムの開発そのものは、電子図書館研究会（代表：長尾附属図書館長）が担当しており、WGはデータの作成及び入力とシステムの評価を担当することになります。このため、今後の予定としては、附属図書館の所蔵する重要文化財をはじめとする貴重図書等の画像データの作成と入力を中心となります。それとともに、入力した画像データについて、検索手段の提供、書誌データ等関連するデータとの連携を行い、これらをもとにシステムの総合評価を行っていきます。これを、電子図書館研究会へフィードバックしていくことによって、実用的な電子図書館システムの実現に協力します。



開室された「D-Lib 開発室」